

ジェフリ・チョーサー作

トゥローイラスとクリセイデ（その四）

宮 田 武 志 訳

アンティゴニーはここで歌をやめました。そこで、「あなた、なんて優しい心を歌った歌なんでしょう、どなたがお作りになったの？」とクリセイデが尋ねますと、アンティゴニーはすぐさま答えました。

「<sup>八八〇</sup>叔母様、とてもご身分が高く、トゥロイの町中で一番きれいなお嬢様よ、とても尊敬せられてご幸福にお暮らしの方ですわ。」  
「きっとそうでしょうね、こんな歌をお作りになるんだから。」

クリセイデはこう言って溜息をつくと、更に言葉をつづけました。

「ああ、愛し合ってらっしゃるこのお二人はこんなにご幸福なんでしょうか、これほど美しい歌をお作りになるんだから。」  
色の白い清楚なアンティゴニーは答えました。

「確かにそうですわ、昔の人にだって今の人にだって出来ないことなんですもの、恋愛の喜びを上手に言葉に言い表わすってことは。<sup>八九〇</sup> だけど叔母様、あわれな人たちのすべてに、恋愛の完全な喜びが分るとお思いになって？ 分らない筈だわ、絶対に。こんな人たちは心がかと熱して来ると、それが全部恋愛だと思ひ込むんだわ。嫌だ、嫌だ、こんな人たちに分りっこないわ、恋愛ってものが。天国が美しいものだろうか？ てことは聖人たちにお聞きしなければ駄目なんだわ、聖人たちならお答えになれるんだから。そしてまた、地獄が醜いものだろうか？ てことは悪魔たちに尋ねるべきだわ。」クリセイデは姪の言うことには答えないうで、「もうすぐ日が暮れそうだわ」と言いましたが、姪から聞いた言葉の一つ一つがしっかり心に刻みつけられて、<sup>九〇〇</sup> 次第に恋というものが最初ほど恐ろしくは感じられなくなり、今や心の中に恋が忍び込んで来て、彼女はいくらか考えを変えることが出来るようになりました。

昼の昏、空の眼、夜の仇敵、このような名で呼ぶべき太陽が昼の道をめぐり尽くして、日脚はやく西に傾きつつその姿を消そうとし、光の薄れてゆくと共に白い物はすべて薄ぼんやりとして来て、星の光が見えはじめましたので、<sup>九一〇</sup>クリセイデは侍女たちと一緒に家の中にはいりました。就寝したいと思い、立ち去るべき人たちがすべて立ち去ってしまった時、<sup>やす</sup>寝みたいとクリセイデが口に出して言いますと、侍女たちが早速クリセイデをベッドに導いて行きました。あたりが静まりかえるや、クリセイデは静かからだを横たえて今度のことをつらつら考えましたが、賢明な皆さんのことですから、クリセイデがどのように考えたかということをお繰返して述べる必要はあるまいと思ひます。クリセイデの臥している部屋の壁の下の方の緑色の杉の木で、一羽の夜鳴鶯がさやかな月に向つて声高く囀るのですが、恐らく烏なりに恋の歌を歌うのでしょう。

その声を聞いてクリセイデは心がすがすがしく楽しくなつて来ました。長い間熱心に聴いているうちに深い眠りに落ちましたが、忽ち夢を見たのでした。夢の中で象牙のように白い羽の一羽の鶯が彼女の胸に長い爪を突き立てたかと思うと、すぐさま心臓をえぐり出して自分の心臓を胸の中に押し込めるのですが、<sup>九三〇</sup>彼女は少しも恐ろしくなく痛みも感じないのです。鶯は取り換えた心臓を残して飛び去りました。

さて、クリセイデは眠つたままにさせておいて、トゥロイラスのことに話を戻しましょう。さきにお話した小競合<sup>こせりあい</sup>から王邸に帰つて来た彼は部屋に坐つて待っていました。二、三人の使者がパンダラスを迎えに行つてしきりに探した挙句、やつと見つけて連れて帰りました。パンダラスはすぐさま家の中に飛び込んで来て言いました。「トゥロイラスさんのほかに居たかしら、今日剣や石弾で散々やられて、かつとなつた人が？」そして、「おやおや、汗びっしょりじゃありませんか」とからかいながら更に、「とにかくお立ちなさいよ、一緒に夕食をいただいて寝ることにしましょうよ」と言いますと、トゥロイラスは、「何なりと御意のままだよ」と答えました。全くすばらしい速さで、二人は夕食から就寝へと急ぎましたが、今やほかの人たちはみな部屋を出て思い思いの所へと道を急ぎながら立ち去りました。<sup>九五〇</sup>トゥロイラスは愛人の消息を聞くまでは悲痛極まりない気持です。そして、「ねえ、君、いま僕は悲しむべきなんだろうか、歌い出すべきなんだろうか」と尋ねますと、パンダラスは答えました。

「静かにしてぼくを寝かせて下さいよ。さあ、お被りになるんですよ、ナイトキャップをさ。ご心配の件はうまく行きましたよ、歌おうと踊ろうと跳び廻ろうとお心のままだ。要するにぼくをご信頼下さればいいんですよ。ねえ、殿下、断言しますよ、姪はきつとあなたに好意をお寄せして熱烈この上なき愛を捧げますよ、あなたが不精から根気を無くして事を失敗に終らせるってことさえなければね。<sup>九六〇</sup>今までぼくは毎日あな

たの為に骨を折って来たんですが、とうとう今朝、お友達としてお愛し致しましょうって言葉を、あなたの為にあれからち得ましたよ。しかも、断じて間違いでございせんって誓うんですからね。ともかくあなたのお悲しみの片足は断ち切られた形ですよ。」

パンダラスの言葉は皆さん既にすべて前にお聞きになったのですから、これ以上くどくどしくお話しする必要はないと思います。ともあれ、夜の寒さのために花びらを閉じて茎の上でうな垂れていたとりどりの花は、輝かしい日の光を浴びて再び立ち直り、自然に相並んで花びらを開くものですが、それと全く同じように、今やトウローイラスは仰ぎ見ながら言いました。「ああ、聖なるヴィーナスよ、あなたの御力、あなたの御恵みを讃えましょう。」そして、パンダラスに向って両手を差し挙げながら更に言葉をつづけました。

「ああ、ぼくの持物をすっかり君に上げてもいいよ。だって、今やぼくの心は全く癒え、心の枷は断たれたんだからね。断言してもいいが、トウローイの町を次々に千も呉れる人があったって、今の喜びには及びもつかないだろうよ。ぼくの胸は喜びのために膨れ上って裂けそうなんだ。だが、ぼくは一体どうすればいいんだろう？ どうやって日を送ればいいんだろう？ 愛するあの人にこの次いつ会えるだろう？ 君がこのぼくのそばを離れてもう一度あの人に会ってくれるまで、その間の長い時間をどうやって消せばいいんだろう？ まあお待ちなさいよって君は言うだろうが、全くのところ、苦しさのあまりうんうん唸りながら待ちもしようじゃないか、首に縄をかけられて吊り下げられた男がさ。」

「後生です、まあ落着いて下さい、すべて物事には潮時ってものがあるんですから。せめて夜が明けるまで待って下さいよ。間違いつこありません、きつと明日の朝早く姪の所に行きますよ。だから、まあぼくの言うようにして下さい。でなければ、この仕事は誰かほかの人にお任せになればいいんですよ、だって、実際、ぼくは今までずっと喜んであなたの為にお尽くしして来たんだし、今夜という今夜まで、正直一徹、ありったけの智慧を絞ってあなたをお喜ばせしようとして来た上、今後も全力を尽くしたいと思ってるんですからね。ぼくの言うとおりになさって、間違いないようにして下さいよ。それがお嫌なら、いくらお苦しみになるにしても自業自得ですね。ぼくのせいじゃありませんよ、あなたのご不幸は。あなたがぼくの千倍もご賢明だっことは百も承知なんです、もしぼくがあなたの立場にあるなら、必らずや断然自ら筆をとって今すぐ手紙を書くでしょうよ、そして悶々の情をあれに訴えて同情を求めますね。ご自分はお救いにならなくちゃ……。不精ですよ、ほっておおきになるのは。ぼくはその手紙を姪の所に持って行きますから、あなたはぼくが先方にいる頃を見計らった上で、すぐさま馬にお乗りになつてさ、いいですか、ご服装は最上のかぎりますよ。何食わぬお顔で姪の邸のそばをお通りになるんですよ。その時、ぼくたち二

人が窓のそばに腰をおろして町を眺めているところがお目にとまるように何とかして仕組んでおきますよ。あなたはお気が向けばぼくたち二人に挨拶して下さった上で、ぼくに向って愛想よくなさるんですね。だが長居は禁物、くれぐれご注意下さって、絶対にそんなことはなさらないように。うまく行けばいいんですがね。さっさとお引き揚げになるんですよ、我慢なさってね。お姿が見えなくなったら、ぼくたちは何だのかんだのあなたのお噂をすることにしますよ、お耳が<sup>103</sup>かっとなるようになってしまふよ。

手紙の書き方なんです、ご如才ないあなたのことですから、相手を侮辱するような言葉を使ったり、むずかしい理窟をこね廻したりはなさらないと思いますよ。文章家の模範文みたいになったり、美文調よろしくついても困りますね。だが、ちよっぴりお涙でしめっぽくお願いしますよ。情愛たっぷりにお書きになるにしても、いくら優しい言葉がいいからって、余りしつこくても困りますよ。だって、こういうこともあるんですからね。<sup>103</sup>つまり、第一流のハーブの名手がとても音色がよくて楽しくなるような最上の名器を使う場合でも、いつも五本の指で同じ一本の絃を鳴らしたり、同じ調子ばかり出したとすればどうでしょう、鋭く尖った爪を使ってみても、聴いている人たちは皆、その演奏、その高い調子を聴くのが嫌になるだろうってことですよ。恋の言葉を並べている最中に医学の言葉を使うっていうような、不適当な言葉の混用もお避けになることですね。<sup>104</sup>そして、何時も内容にふさわしい形式を用いて、そのような形式で終始一貫するようになることですよ。だって画家が梭魚<sup>かます</sup>を画こうとする場合に、それに驢馬の足と猿の頭をくつつけたとすればどうでしょう。不調和も甚だしくて、何のことはない、ただお笑い草になってしまうだけでしょうからね。」

この忠告は大いにトゥローイラスの意に<sup>かな</sup>適いました、戦々<sup>きよきよ</sup>競々たる恋人の常として彼は言いました。

「親愛なるパンダラス君、全くのところ、手紙を書くのが恥ずかしくってね。だって、浅学の致すところ、まずい言葉を使うかも知れないし、あの人<sup>105</sup>がぼくを軽蔑して手紙を受け取ってくれないかも知れないからね。そんなことにでもなれば、ぼくはとても生きてはいられないよ、死ぬより手がないんだから。」

それに対してパンダラスは答えました。

「およろしければ、ぼくの言うとおりになさって、ぼくに手紙を持って行かせて下さいませんか。誓って申しますが、まさに姪からその返事をすぐ聞いて来ますから。嫌だと仰有るのなら致し方がありません。だけど、あなたのお心に逆らってまであなたのご幸福のためにお力添えし

ようっていう男の立つ瀬がないじゃありませんか、生涯。」

トゥローイラスは答えました。

「よし、承知した！ 腰を上げて書くことにしよう、君の希望なんだから。首尾よく手紙が書いて君に持って行ってもらうことが出来ますようにって、<sup>一〇六〇</sup>聖なる神に恭々しく祈ることにするよ。色白きミネルヴァの女神よ、手紙の書ける智慧をわたくしにお授け下さい。」

トゥローイラスは腰をおろして次のように手紙を書きました。

まず初めにクリセイデをわが愛する人、わが心の命、わが喜び、悲しみの癒やし手、わが幸福と呼び、また、このような場合に世のすべての恋人たちが求めるあらゆる呼び方を用いました。そして、極めて謙譲な言葉遣いで<sup>一〇七〇</sup>彼女の好意を求めましたが、それをすっかりお話しては時間がかかって仕方がありません。そのあと、愚かしくも大胆にあなたに手紙を書いたが怒らないでいただきたいと辞を低うして懇願し、これみな恋の為すわざで、書かなければ死んでしまうに違いないと書き添えて、いとも痛ましく同情を求めました。それから、これは全く空々しい言葉なのですが、自分は取るに足らぬ浅学の身であるが自分の貧弱な知識を大目に見ていただきたいと乞い、<sup>一〇八〇</sup>あなたが恐しくて仕方がないので付け加えました。自分の至らぬことについて絶えず自責しながら、そのあと、自分の悲しい胸のうちを披瀝する言葉が綿々と果てしなくつづきました。最後に、常に誠実な心持を持ちつづける積りだと結んでのち、もう一度その手紙を読み返してからそれを折りたたみました。印形に嵌めたルビーを塩からい涙で濡らしながら、彼はすばやくそれを封蠟に押ししました。<sup>一〇九〇</sup>そして封をした手紙に何時までも繰り返して接吻したので言いました。「手紙よ、幸運がお前を待ち構えているのだ、あの人に見られるのだから。」

パンダラスはあくろ朝早くその手紙を携えて姪の邸に赴きましたが、もう九時過ぎだよ、としきりに毒づきながら冗談口を利くのでした。「ねえ、ぼくの心は全く生々してるんだよ、とても苦しいんだけれどね、五月の朝には眠れないでさ。ああ、胸の楽しい悩み、嬉しい悲しみよ。」

<sup>一一〇〇</sup>クリセイデは叔父の声を聞いてなんだか恐しいような気持がしましたが、同時にまた叔父が何しに来たのか聞きたい気もして答えました。

「あらまあ、叔父様、どんな風の吹き廻しでここにいらしたの？ 楽しい悩みってのをお話し下さいませんか？ それに、懺悔のお話も。恋愛ダンスのお手は上りまして？」

「いや、いつも人の後について踊ってるよ。」

クリセイデは笑いにくずれて心臓が破裂するかと思われましたが、パンダラスが言うには、「ぼくをからかって呉れて結構だよ、何時だって。だけ<sup>一一〇</sup>、まあ聞いてくれないか、丁度今この町に来訪者があるんだが、それはギリシャの間諜でね、新しい情報をもたらしたんだが、ぼくはそれを知らせに来たんだよ。さあ、庭に出ようじゃないか、極秘でそのことを詳しく話すから。」

こう言いながら、二人は腕を組み合って一緒に部屋から庭に出ましたが、話声を誰にも聞かれない所まで来ますと、パンダラスは手紙を取り出して姪に言いました。

「ねえ、完全にお前のものであるあの方がさ、いともつつましやかにお前の好意をお求めになって、ぼくに托してこの手紙をお前にお届けになったんだよ。ひまな時によく読んでいい返事を考えておいてもらいたいんだ。卒直に言うが、もしそうしてくれなければ、たしかに、あの方はご煩悶の挙句お命も長くはもつまいと思ふんだよ。」

クリセイデは恐しそうに身動きもしないで立ったまま、その手紙を手に取りろうとはせず、つつま<sup>一一三〇</sup>しやかな顔の表情が変って来ましたが、やがて言いますには、

「そのようなことに触れた手紙なら、後生ですわ。どんな手紙でも絶対にわたしの所にお持ち下さらないように。それにまた、叔父様、あの方のご希望より、わたしの立場の方をもっと重視していただきたいわ。これ以上何も申し上げる必要はございません。ただ、よくお考え下さいましな、こんなことをなさるのが道理に叶ったことかどうかってことを。あの方の為をお思いになって、また、叔父様のご不精から、本当のことをお隠しになるなんてことをなさらないように。それに、一体全体わたしの身にふさわしいことかしら、このお手紙を受け取ることが？<sup>一一四〇</sup>また、自分の名誉を傷つけたり世間の譏りを受けたりしてまであの方にご同情申し上げることが？ねえ、お持ち帰り下さいましな、このお手紙。後生一生ですから。」

「全く驚いたね、初めてだよ、こんなことは。よしてもらいたいね、馬鹿な真似は。手紙を持参してお前の名誉を傷つけてやろうだの何だのって、万が一にもぼくにそんな積りがあるとすれば、雷に打たれて死にたいよ。どうしてこんな態度に出たがるんだね、お前。だが、自分<sup>一一五〇</sup>に仕えることを最大の念願にしている男性がどうなるうが一向構わない、生きようが死のうが全然知ったことじゃない、お前たち女性の殆んど全部がこういう態度を取るらしいね。それはともかくとして、拒絶しないでもらいたいね、ぼくに免じてさ。」

こう言いながらパンダラスは姪をしっかり捉え、その懷中に手紙を突っ込みながら言いました。

「さあ、この場ですぐこの手紙を投げ捨ててご覧、みんな眼を見張ってわれわれ二人を見るだろうから。」

クリセイデは、「人がいなくなるまで辛抱できますわ。」と言って、笑いながら更に言葉をつづけました。

「叔父様、お願いですわ。<sup>二六〇</sup>叔父様のお気に召すようなご返事をご自身でお書きいただきたいわ。だって、わたし本当に書く気になれないんですもの、手紙など。」

「書かないって？　じゃ、ぼくが書いてもいいよ、お前が口で言ってくればね。」

それを聞いて姪が笑いながら、「さあ、お食事にしませうよ。」と言いますと、叔父はしきりに自嘲しながら答えました。「ねえ、お前、ぼくは一日置きに食事抜きなんだよ、恋に心焦がれてさ。」それからパンダラスがとてつもない冗談を連発するので姪はその馬鹿らしさがおかしくてたまらず、息もとまるかと思われるほど笑いぐずれました。

<sup>二七〇</sup>広間にはいるやクリセイデは、「さあ、叔父様、すぐお食事にしませうよ。」と言いながら数人の侍女を呼びましたが、自分はまっすぐに自室にはいりました。外にもすることがあったのでしょうか、ひそかに手紙を読むということもたしかに仕事の一つだったので。行を追って一語一語熟読して行きましたが、非の打ちどころもないので、よく心得た方だと思いました。やがて手紙を片付けて食事に赴きましたところ、<sup>二八〇</sup>パンダラスは考え込んで立っています。クリセイデが気づかれないように彼の頭巾を押えて、「そら、捕虜よ、ぼんやりしてらっしゃるから」と言いますと、叔父は、「何とでもするがいいさ、好きなように」と言い返しました。それから二人は手を洗って席に着き、食事をはじめたのでした。

午後になってから、パンダラスは街に面した窓の側にさりげなく上手に近づいて行って、「クリセイデ、あの向うの正面に見える家ね、小さいれいにしてある、あれ誰の家なの？」と尋ねますと、「どの家？」<sup>二九〇</sup>と言いながら姪は眺めました。よく知った家なのでその名を教えました。

二人は窓際に腰をおろして何でもない世間話をはじめましたが、今や話の潮時はよし、召使たちは皆立ち去ったと見定めて、パンダラスが、「ねえ、クリセイデ、さっきの続きを頼むよ。例の手紙のことなんだが、あれをどう思うかね。書く術をよく心得てらっしゃる？　ぼくには全然見当がつかないんだが」と言いますと、姪はその言葉を聞いて蓄薇色に頬を染めました。口籠りながら、「ご立派ですわ。」と答えました。

叔父は、「後生だから、いい返事を差し上げてもらいたいね、あの方に。そのご褒美にはぼくがお前の手紙を継ぎ合わせて上げるよ」と言いながら、両手を差し上げて跪いて言葉をつづけました。

「ねえ、クリセイデ。つまらないことかも知れないが、手紙を継ぎ合せて折りたたむことは、ぼくにさせてもらいたいんだよ。」

「畏りました。わたしは書くことが苦手だわ。それに、あの方にどう申し上げればいいんだか、それも分らないわ。」

「いや、そんなことを言うものじゃないよ、クリセイデ。頼むよ、せめてあの方のご好意に対してお礼を申し上げてさ、あの方のお命をお救いしなくちゃ。後生だ、クリセイデ、今度だけはぼくの言うことに逆らわないでもらいたいね。」

「ああ、神様、万事都合よく行きますように。神様、お助け下さいませ、およそ手紙というものは全然書いたことがないのですから。」

一層いい智慧を絞りたいものと、ただ一人自室に籠って、侮蔑という牢獄から少しく自分の心を解き放ちながら、腰をおろして手紙を書きはじめました。その手紙の要旨をわたしの知っている限りにおいて要約したいと思えます。自分に対するトゥロイラスの好意には感謝するが、期待を持たせた上で裏切るといふようなことはしたくないし、自分自身としても恋のために束縛されてしまいたくはない。しかし、彼の心を和げるために、常に喜んで妹として彼の気に入るようにしたいというのでした。その手紙に封をして叔父のいるところに行きますと、叔父は坐ったまま街を眺めています。碧玉石の腰掛の金刺繡を施したクッションの上に叔父と並んで腰をおろして、「叔父様がやかましく仰有るので書いたのですけれど、こんな苦しい目に遭ったのは初めてですわ、全く。」と言いながら手紙を叔父に渡しますと、叔父は感謝しながら言いました。

「苦は楽の種ってことはよくあるものだよ、たしかに。ねえ、クリセイデ、あの方もお喜びになるに相違ないよ、きつとそうだよ。だって、お前というものがやっとお手にはいったんだもの。世間でも言うじゃないか、薄き感銘は常に容易に去らんとすってね。とにかくお前の暴君振りたるや随分久しいものだったね。お前の心を彫るのは容易なことじゃなかったよ。依然として慎重に構えていたい、お前はそう思うかも知れないが、いつまでもそんな態度を続けるのはよしてさ、一刻も早くあの方をお喜びさせることだよ。いいかい、あまり長く冷淡にしていると、得てして人をうんざりさせて恨みを買うものだよ。」

二人がこんなことを議論し合っている丁度その時、街のはずれからトゥロイラスが十人の部下を従えて静々馬を進めて来ました。王邸に帰る道順として、二人の坐っている方に向けて曲二五〇つて来ます。パンダラスはその姿を見つけて言いました。

トゥロイラスとクリセイデ（その四）



「クリセイデ、ご覧よ、こちらに来る人を、いや、隠れちゃ駄目だよ。あの方もわれわれにお気付きになってるよ、きっと。敬遠するんだなんてお思いになっちゃまずいじゃないか。」

クリセイデは、「いいえ、逃げるなど。」と言いながらも頬を薔薇色に染めました。この様子を見てトゥローイラスは恐れ憚るような面持でいて、いねいにクリセイデに挨拶しましたが、その顔色は幾度となく変りました。それから優しく顔を上げて、<sup>二二六〇</sup>パンダラスに会釈してのち通り過ぎて行きました。げに堂々たるその日の彼が馬上の姿、見やるだに美しきその姿！ げに雄々しき武者振り！ その装いについて今くどくどくお話しするには及びますまい。このような有様をつらつら打ち眺めていたクリセイデには、その人柄、服装、容貌、表情、立派な態度、優雅な様子など、要するにあらゆる点が極めて好ましく感じられ、<sup>二二七〇</sup>この時ほど彼の苦悩に同情を覚えたことは未だ嘗てなかったのです。これまで如何に冷淡であったにせよ、今やクリセイデが棘で刺されて、一週間もそれを引き抜くことができなようにと祈りましょう。引き抜くべき棘をほかの女にも神の与え給わんことを！ クリセイデのすぐ側に立っていたパンダラスは鉄の灼けたのを知ってそれを打ちはじめながら言いました。

「ねえ、お前。心からのお願いだ、ちょっと尋ねたいことがあるんだが答えてくれないか。つまりだね、男性には何の罪もないのに、<sup>二二八〇</sup>ただ女性が同情してくれないばかりにその男性が死んで、その死の責任は専ら女性にあるっていうようなことなんだが、そんなことがあっていいものだろうか。」

「いいえ、いけませんわ、絶対に。」

「お前の言うとおりでよ、全く。ぼくの言うことに嘘はないんだ。そのことはよく分ってくれるだろうね。やあ、ご覧よ、あそこにあの方がお行きになるよ、馬に召してさ。」

「あら、ほんとう。」

「ねえ、もう三度も言ったんだが、他愛もなく恥ずかしかったり馬鹿な真似をするのはよしにしてさ、あの方とお話してあの方のお心を和げて差し上げるようにしてくれないかね。お前が小心翼翼たる有様じゃ二人とも煩悶するばかりじゃないか。」

けれどもパンダラスはここで一骨折しなければならなかったのです。<sup>二二九〇</sup>すべての事情を考慮に入れると、話を交わすということは不可能であり

ましよう。なぜならば、名譽を傷つけはしないかということもありますし、また、そのように大きな自由をトゥロイラスに与えるのは時期尚早だとも言えるでしょうから。クリセイデも自ら言うように、彼女の意向ははっきりしていたのです。つまり、できれば人に知れないように彼を愛したい、彼の好意に酬いるにしても、それはただ、彼と会うということだけにとどめたいということにあったのです。併しながらパンダラスは考えました。「できることなら、これくらいのことでも済ませたくはない。こんな馬鹿な考えは九二年と続かせるものか。」ともあれ、このようなことについて今くどくどしく述べないことにしましょう。<sup>一三〇〇</sup>差し当ってはパンダラスも姪の決意に同意しなければならなかったのです。日も暮れて来ましたし、万事都合よく運びましたので、彼は立ち上って別れを告げました。あたふたと大急ぎで帰路につきましたが、まさに喜びのために心も躍る思いです。帰ってみるとトゥロイラスはただ一人ベッドに横たわっていました。恋をする者の常として、夢うつつの有様で希望と暗い絶望の間をさまよっていたのでした。パンダラスは家の中にはいるなり、「持って帰りましたよ、いい物を。」と言わんばかりにはしゃぎ声を立てながら、更に言葉をつづけました。

<sup>一三二〇</sup>「宵のうちから誰だろう、ベッドにもぐり込んでるのは？」

「ぼくだよ、君。」

「誰？ トゥロイラスさん？ いや、これは驚いた、全く。さあ、起きて下さいよ、そしてご覧にならなくちゃ、丁度いまあなたに届けられたおまじないをさ。これがあればあなたの熱病など治ってしまいますよ、為すべきことはでききおやりになるとして。」

「そうだ、神の御力によってね。」

パンダラスは手紙を差し出しながら言いました。

<sup>一三三〇</sup>「神のご加護があったんですよ、たしかに。さあ、<sup>一三三〇</sup>明かりを持って来て、書いてあることをすっきりお読みになるんですよ。」

けれども、手紙を読んで行く間、その言葉が或は希望を或は恐怖を与えるままに、トゥロイラスの心は幾度となく喜びに躍り恐しさに慄えました。しかし結局、クリセイデの書き送ったすべての言葉を最も善意に解釈したのでした。というのは、なるほど言葉はほかしてあるもの、安んじて可なりと思われるふしぶしが目についたからです。このようにいい方の面に取り縋って行くうちに、希望も生じ、また、パンダラスの約束の言葉もあることとて、<sup>一三三〇</sup>少くともはげしい悲しみは忘れ去ってしまったのでした。けれども、常日頃われわれの目に触れるように、薪炭を

増せば火勢はますます強くなるのですが、丁度それと同じように、如何なる期待もそれが大きくなればなる程、しばしば慾望もそれにつれて増大するものです。また、樫の木は小さな芽から生長して行くものですが、それと同じく、クリセイデの書き送った手紙によってトウロイラスの慾望はますます増して行き、そのために身を焼く思いがするのでした。そこで、繰り返して申しますが、期待のためにトウロイラスの慾望は日夜以前より強くなって行き、パンダラスの教えるところに従って、全力を挙げて追い縋って行きながら悲痛な胸の内をクリセイデに書き送りました。来る日も来る日も慾望は鎮まらず、パンダラスに托して何かと書き送り言い送ったのでした。このような場合に世の恋人たちの行状も色々なことも彼はやってみました（三一五〇）散子の運勢占いによって喜んだり悲しんだりもしました。かくて絶えず計画に従って歩みをつづけましたが、受け取る返事の如何によって一喜一憂するという有様でした。ともあれ、何時もパンダラスを頼みとし、絶えずあわれにも彼に向って泣言を並べ、彼の忠告や援助を乞うのでした。狂気のようなその苦悩の様子を見て、全くのところ、パンダラスは同情のあまり息が絶えそうになるのでしたが、できるだけ早く少しでもその悲しみを除いて上げようと、まめまめしく心を配りながら言うのでした。

「主君であり、友人であり、兄弟とも言うべきトウロイラスさん、あなたのご煩悶のお蔭でばくも気が滅入ってしまいますよ、全く。憂鬱なお顔をなさるのはよしにして下さいませんか。そうして下さるなら、断然保証しますが、二日とたたない内にあなたをある場所にご案内して、ご自身のお口から姪に同情をお求めになることが出来るように工夫してみます。ご存じだかどうか知りませんが、恋愛の達人が言ってますよ、それは、求愛の機会と悶々の情を打ち明ける安全な場所を持つことが恋愛の進捗上一番大切な事柄の一つだということです。だって、罪もない男が悲しんでるのを見たり聞いたりすれば、いくらか同情心も起ろうじゃありませんか、心さえ優しくければね。恐らくあなたはこうお考えなんでしょう、人情の然らしめるところ、あの人も最初は自分の苦悩にある程度同情してくれるだろうが、あの人の慎みの心が、いいえ、決してあなたのものにはなりませんって囁くだろう、奥底の本心は支配的だから、靡くように見えても根本の気持は変わらないだろう、これでは結局自分の心は癒やされないじゃないか、こうお考えになるんでしょう。（三三八〇）

それに対してこうお考え下さい。つまりですね、頑丈な樫の木がしばらくの間散々切り込まれたのち、倒れよとばかりたたか打ち込まれると、その強力な一撃で岩石や石臼のようにその樫の木は突然どさりと倒れるものですよ。倒れるとなると重いものは軽いものより倒れ方が速いのですからね。風の吹く度にいと易々と靡く葦は風がやめば忽ち立ち直るものですが、樫の木は一度倒れたとなるとそうはいきませんよ。（三三九〇）

くどくど例を挙げなくてもいいでしょう。大きな仕事が立派に成就せられて確固不動なものになるってことは愉快なものですよ、それだけ長い期間を要したとしてもね。」

「それはともかくとして、トゥローイラスさん、お尋ねしたいことがあるんですが、およろしければお答え下さいませんか。ご兄弟のうちであなたが心中ひそかに一番愛してらっしゃるのはどなたでしょうか。」

「そうだね、兄のデイフォバスさんだよ。」

「それじゃ、<sup>一四〇〇</sup>兄君がそれとはお気付きにならないで、あなたのお気持ちを和げて下さるように工夫してみましょう、二十四時間以内にね。まあぼくにお任せ下さい。そして、全力を尽くさせて下さい。」

こう言ってパンダラスは早速デイフォバスの所に行きました。デイフォバスこそ前からずっとパンダラスの主君であり親友であり、トゥローイラスを除いては彼の一番好きな人物でありました。くどくどしくお話しするのはやめて簡単に申しましよう。パンダラスが、「わたしの関係している事件にご助力願えないでしょうか」と言いますと、<sup>一四一〇</sup>デイフォバスは答えました。

「いいとも。君もよく知ってることなんだが、最愛の弟トゥローイラスの為に尽くすのは別として、ぼくは誰の為よりも君の為に尽くしたいんだ、実際は。とにかく言い給え、何のことだね？ 君にとって重大だと思われる事に対して反対したことは今まで一度もないんだし、今後とも絶対に反対しない積りだよ。」

パンダラスは感謝して言いました。

「ねえ、殿下、この町に一人の婦人、つまり、わたしの姪が住んでるんですが、クリセイデって言うんです。ところで、この姪を迫害して不当にもその財産を奪おうとする手合がいるんですよ。<sup>一四二〇</sup>そこであなたのお力添えをお願いしたいんです。つまり、われわれの味方になっていただきたいんですよ、ただこれだけのお願いなんです。」

「君は他人行儀な言い方をするが、その人はクリセイデさんじゃないかね、ぼくの友達の子さ。」

「そうなんですよ。」

「じゃ、君、多言無用だよ、全く。大丈夫だ、選ばれた戦士になるよ、<sup>おつより</sup>押取刀でさ。相手の連中全部の耳にはいったって平気さ。君言ってく

「ないか、どうすれば一番お役に立てるだろう？ 事件の一部始終は君が知ってるんだから。」

「そうですね、そのことなんですが、姪自身がここに伺って窮状を訴えるようになって、明日にでも殿下からあれにそう仰有っていただくこと、このことに今ご同意下されば光栄なんですが。そう願えれば相手の連中はきっと震え上るでしょうよ。更にこういうことを今お願い申し上げてもいいでしょうか、つまり、大変お手数をおかけすることになるんですが、ご兄弟の殿下たちの内でこの事件に一層よくご助力願える方々がここにご同席下さるようにお取り計らいいただきたいんです。そうすれば、殿下のお智慧も拝借できることですし、ほかの方々のお指図も仰げるんですから、姪もきつとお助けいただけらるだろうと思いますよ。」

立派な事、慈悲深い事には同意する性格のこととて、デイフォバスは答えました。

「そうすることにするよ。ところで、今一つ、一層役に立つことが考えられるんだが、どうだね。ヘレンさんに相談するために使をやっている？ それが一番いいと思うよ。パリスさんをすらのままに操ることのできる方なんだから。ぼくの主君であり兄であるヘクターさんなんだが、あの方にはご援助をお願いする必要はないだろう。だって、クリセイデさんのことをあの方が口を極めてお褒めになるのを二、三度耳にしたことがあるんだよ。お覚えいともめでたいんだ。だから、こちらからご援助をお願いしなくて、まさにこちらの望むとおりにご自分でなさるよ。それから、トゥローイラスにはぼくに代って君からよく話してくれ給え。そして、食事を共にしていただきたいんだ。」

パンダラスは、「殿下、万事仰せのとおり致しましょう」と言い残して別れを告げ、脇目もふらず真直ぐに姪の邸に向いました。折しも姪は食事を終えて立ち上がったところでしたが、彼は腰をおろして言いました。

「やれやれ、走ったのなんのって！ ほら、クリセイデ、こんな汗だよ。この汗の分だけよけいにお礼を言ってもらうべきだかどうだか知らないがね。ところで、聞いたかい、お前？ 例の悪党のポリフィーターズがまた訴訟だのなんなのって騒いでさ、改めてお前を訴えようとしてるそうじゃないか。」

「わたし？ いいえ、まだ。」と行ってすっかり顔色を変えながら姪は言葉をつづけました。

「この上何をしようって言うんでしょう、わたしを困らせたりいじめたりするために。ああ、どうすればいいのかしら？ このような場合に

あの人の味方をするアンティノーだの、イーニアスだのさえないなければ、あの人などなんとも思わないんだけど。いいえ、叔父様、こんなこと何でもありませんわ、ほんとうに。欲しがる物はすっかりあの人にやってしまいますわ。そんな物なくしたって、こちらには助けて下さる方が沢山いらっしやるんだもの。」

「いや、そんな真似はあれにさせないよ。たつた今頃はデイフォバスさん、ヘクターさん、そのほかのおえら方の所に行って来たんだが、これを要するにだ、みんな揃ってあいつの敵に廻って下さることになったんだよ。あいつがいつ喧嘩をおっ始めようが、どんなに力んでみようが、勝ちっこないさ、絶対に。」

二人が最善の方策を考えている丁度その時、デイフォバスが鄭重にも自らやって来て、明日食事を共にしていただきたいとクリセイデに懇請しましたが、クリセイデは辞退しないで快くその懇請を容れましたので、彼は礼を述べて立ち去って行きました。簡単に申しませう。話が終るとパンダラスはすぐ立ち上って、石のように身じろぎもしないでいるトゥローイラスの所に行き、デイフォバスを口車に乗せた次第を逐一話したのち、更に言葉をつづけました。

「大丈夫ですか、いよいよ腕をお振りになる時ですよ、明日こそ。そうすれば万事こちらのものだ。お話をなさったり、懇願してご覧になり、あわれっぽく泣言を並べてみたりなさるんですよ。しっぺお願ひしますよ。他愛なく照れたり、びくびくしたり、ぐずぐずしたりなさらないでね。男性たるもの、時には心の悩みを打ち明けなくちゃ。いいですか、そうすれば姪もきつとあなたにご同情しますよ。全くのところ、あなたを救うのはあなたの誠実ですよ。だけど、あなたは今恐れてらっしやる、はつきり分りますね、そのことが。びたりと言いついて見ましようか、そのご心配の種を。こう考えてらっしやるんだ、そんなことは出来そうにもない、だって、あの人との恋愛のために元気がないんだってことが顔付きから人に感づかれるに相違ないじゃないか、むしろ悲しみを抱いて人知れず死ぬ方がまだ、こうお考えなんでしょう。」

「そんな風にお考えになるのはよして下さい、愚の骨頂ですよ。ぼくは丁度いま、あなたのお顔つきをごまかすための妙案を一つ思いつきましたよ。全く病人そっくりのお顔つきなんだから丁度いいんですが、病気を少しでも追っ払うために気晴らしをするんだって振りをなさって、今夜早速デイフォバスさんのお邸にお出かけになるんですよ。暫くしてからベッドにごろりと寝ころんで、苦しくて起きちゃいられないんだって仰有る。そうして、そのまま寝ていらして機会をお待ちになるんですよ。それから、何時もきまわって今時分熱が出てあくる朝まで続くんだって

仰有る。お手際の程を見せて下さいよ、だって、悲しみに沈んでる人はたしかに病人なんですからね。じゃあ、お出かけ下さい、さようなら。ヴィーナスも保証してくれるでしょうが、しっかり覚悟をきめておやりになれば、あなたに対する姪の同情の念だっどと強まって来ると思っていますね。」

「仮病けびょうを使って君は忠告してくれるんだが、その必要はないよ、だって、ぼくは正真正銘本物の病人で、苦悶一五三〇のあまりまさに死のうとしてるんだから。」

「いくらでもお歎きになればなるほど、それだけ仮病の必要がなくなるって訳ですよ、だって、人が汗を流がすのを見れば誰だってその人が暑いんだろうって思いますからね。とにかく待伏せ場所にそっとお隠れになって下さいよ。弓の矢のとどく範囲にうまく鹿を追い込みますから。」

こう言ってパンダラスは静かに別れを告げ、トゥロローイラスはすぐさま王邸に向いました。彼は未だ嘗てなかったほど歎喜を覚え、パンダラスの忠告を全面的に容れてその夜一五四〇デイフォバスの邸に赴きました。デイフォバスが弟を愛想よく迎えたこと、トゥロローイラスが発熱を装って病人らしく振舞ったこと、彼がベッドに横たわった時人々がその上に衣類を掛けながら彼の心を引き立てようとしたこと、このようなことについてお話しする必要はありますまい。けれども人々の努力はすべて無駄に終わりました、皆さんも既にご存じのとおり、パンダラスがさきに計画したところに、トゥロローイラスは終始忠実に従ったからです。ともあれ、その夜トゥロローイラスが就寝するに先立ち、クリセイデに味方して助けてやってもらいたいとデイフォバスが彼に依頼したのはたしかな事実です。そして、全力を挙げてクリセイデの真の友になることをトゥロローイラスは直ちに承諾したようです。併しこのようなことをトゥロローイラスに依頼する必要があったでしょうか。狂人に走れと命じる必要のないのと同じではありませんか。

あくる朝になって正餐の時刻も近づきました。美しい王妃ヘレンは期待を裏切らないようにと、十時の定刻にはデイフォバスの所に行く用意をしましたが、姉として全く打ち解けた態度で、一五六〇しかも何等の疑いをも抱かずに正餐に列したのでした。この会食の意味を知っている者はパンダラスの外に誰一人としてありません。クリセイデもまたその意味を全然知らないで、アンティゴニーとその妹のターピを伴ってやって来ました。けれども、たしかに今は冗長を避けることが一番ですから結末に急ぐことにして、何故人々がここに集って来たのかということはこれ以上

述べないでおきましょう。また、彼等が挨拶を交わした模様をお話しすることも省きましょう。デイフォバスは彼等を大いに歓待し、喜ばれそうなど馳走を余さず取り揃えて出しましたが、「ああ、弟のトゥローイラスが気分が悪くてまだ寝てるんですよ」と絶えず繰り返しながら溜息をつくのでした。しかしその後、客人たちを楽しませようと全力を挙げて大いに努め、にこやかに愛想を尽くしました。ヘレンもまた、トゥローイラスの病気を心から悲しんで、そばで聞いていても気の毒なくらいでした。居合わせた人たちはみんな熱病に対する俄か医者になり澄まして、こうすれば治りますよ、<sup>一五八〇</sup>こんなまじないをお教えしましょう、などと口々に述べ立てましたが、口に出して言おうとしないものの、あの方のご病気はわたしが一番よくお治しできるんだわ、と心の中で考えている人が一人いたのです。

誰か一人が褒め初めると一同それに同調するものですが、一しきり気の毒がったのち、人々はトゥローイラスを褒め初め、あの方ほどの人物、あの方ほど才能のある人は滅多にありませんよとばかりに彼を褒めそやして、太陽より千倍も高く祭り上げるのでした。そしてパンダラスは彼等が弁じ立てることについて、その賞讃の言葉を裏書きすることを忘れなかつたのです。<sup>一五九〇</sup>クリセイデは彼等の言葉を余さず聴きながら一つ一つの言葉に心を留め、澄まし顔をしているものの、心は嬉しさのあまりわくわくするのです。このような立派な騎士の生死を制し得るとは大したものだと自分を賞讃しない人がいるだろうか、そう思ったからです。けれども、このようなことをお話ししては皆さんを長くお引き止めすることになりませんので、すべてを省くことに致しましょう、一つのテーマに従って話を進めているのですから。

正餐の席から腰を上げる時刻が来ましたので、各人は適宜に席を立てて暫くの間四方山の話をお交わしましたが、<sup>一六〇〇</sup>間もなくパンダラスが話の腰を折ってデイフォバスに言いました。

「前にもお願い致しましたが、およろしければクリセイデの窮状についてお話しただけでないでしょうか。」  
クリセイデの手を握っていたヘレンが、「すぐ始めましょうよ、そのお話を」と最初に口を切って、クリセイデの方を優しく見ながら更に言葉をつづけました。

「あなたをいじめる男なんて、ジョーヴの神様の神罰靦面、悪運尽きてさっさと死んでしまえばいいのに。<sup>一六一〇</sup>わたしの力も及ばず皆様のご誠意の甲斐もなくてあの男が後悔しないとすれば、こんな悲しいことはありませんわ。」

デイフォバスが、「姪御さんのことだ、君話し給え、一番適任なんだから」と言いますと、パンダラスは、「紳士淑女諸君、事情をご説明致



しましよ。手短かに申上げます」と口を切って、唾をひっかけたくなるほど憎むべきポリフィーターズなる姪の仇について、一座の人たちに向って鐘を打ち鳴らすように一席弁じ立てました。それに応じて人々の言葉は次第に激して行き、よし兄弟であつても絞首刑さ、あんな男は！ 容赦するものか、火が降っても槍が降っても！ とポリフィーターズを罵倒するのです。くどくどしくお話しないことにしましよ。いやしく自分たちにできる事ならどんな事でもしてクリセイデを助けよう、人々は異口同音にこのように固く誓いました。ヘレンが、「パンドラスさん、わたくしの主君であり兄であるヘクター様はこの事件をご存じなのでしょう。トゥロイラスさんは如何でしょう？」と尋ねますと、パンドラスはそれに答えました。

「ええ、ご存じですよ。だけど、まあお聞き下さい。ご同意下さるかどうか存じませんが、わたしにはこう思われるんですがね、つまり、トゥロイラスさんは今ここにいらっしやるんですから、クリセイデがお暇する前に自分の口から一部始終をトゥロイラスさんに申し上げるのがいいんじゃないかってことなんです。だって、相手が女性なんですから、トゥロイラスさんもそれだけしみみとあれの悲痛な気持を汲んで下さるでしょうからね。ご免蒙ってちょっと奥に行ってみることにしましよ。そして、トゥロイラスさんが眠ってらっしゃるんだか、それとも、話を聴いて下さるんだか、すぐお知らせしますよ。」

パンドラスは奥の部屋に飛び込んで行って、トゥロイラスの耳もとで、「あなたの魂を神が召し給わんことを！ あなたの柩を持って来ましたよ。」と囁きました。トゥロイラスはこの言葉を聞いてにやりとしましたが、パンドラスは説明もしないですぐさま飛び出し、ヘレンとデイフォバスの所に取って返して言いました。

「長座されたり大勢で押しかけたりしては困るが、今ここにいるクリセイデを伴ってお二人だけなら来ていただきたい、無理をしない程度で事情をお聴きしてみようってことです。だけどご存じのとおり、部屋が狭くて数人はいれば忽ちむっとするんですから、如何でしょう、クリセイデは後ほどまで待たせておく方がよくはないでしょうか。わたしとしては、大勢の方々をお連れしてあの方のお体をそこねただの、お気持を乱したのって責められたくないんです、右腕を失つてもね。よくお考えいただきたいですね。ご分別がおありになるお二人に。」

わたしなりの意見を言わせていただくなら、お二人以外にはどなたもおはいりにならないのが一番いいんじゃないでしょうか。ただし、わたしは別ですよ。だって、わたしはあつと言う間にこの事件を陳述してみせますからね。姪にはできない芸当ですよ。そのあとで、姪がただ一度

しかもごく簡単に、ご庇護をお願い致しますとだけ言って退出するんですよ。こういうことにすればあの方のお気持を大して乱さないで済むんじゃないでしょうか。あの方もお二人に対してはご遠慮なさらなくてもいいでしょうが、<sup>一六六〇</sup>姪はおなじみが薄いんですから固くおなりになるってこともあるでしょうしね。それに、わたしはよく知ってるんですが、姪には関係のない、町の利害に関する秘密事項をお二人にお話ししたいってご意向もありませんよ。」

パンダラスの意中を全然知らない二人はそれ以上とやかく言わないで、トゥローイラスのいる所には行って行きました。ヘレンはいとも優しく物柔らかにトゥローイラスに挨拶し、女らしい態度で、「とにかくお起きにならなくちゃ駄目ですわ、トゥローイラスさん。<sup>一六七〇</sup>ご全快をお祈り致しますわ」と言いながら彼の肩の上に手を置いて、心を引き立てようと全智能を絞り、全力を尽くして元気づけようとしたが、更に言葉をつづけて言いますには、

「お兄様のデIFOバス様とわたくし、それにパンダラスさんの後生一生のお願いなんですけれど、全く無理難題を吹きかけられて困ってらっしゃるクリセイデさんを心から保護して助けて上げて下さいませんか？ この事件はここにいらっしゃるパンダラスさんがよくご存じで、<sup>一六八〇</sup>わたしよりも一層よく事情をお話し下さいますわ。」

そこでパンダラスは改めて舌端なめらかに、すぐさま一部始終を話しはじめました。やがて話が終って、トゥローイラスが、「誓って申しませんが、クリセイデさんをお助けする一員として全力を尽くしますよ。歩行可能になり次第喜んで。」と言いますと、「まあ、すばらしいこと」とヘレンは答えました。「お暇する前に姪にご挨拶させたいんですが如何でしょう。」とパンダラスが言いますと、<sup>一六九〇</sup>トゥローイラスは、「是非そう願っていたいね。あの方がそうして下さるのなら。」と答えてのち、「デIFOバスさんと親愛なる姉上のお二人にお話ししたいことがあるんですがね。お智慧を拝借していい考えを出したいんですよ」と言いながら、一通の書類と書状を偶然枕もとで見つけたような振りをして、ご考慮願いたいと直ぐ様真剣な顔つきで二人に乞うのでした。<sup>一七〇〇</sup>それは、誰であったかよく知りませんが、ある人物を死刑に処して然るべきかどうかについて意見を聞かせてもらいたいと、ヘクターが彼に送って来たものなものでした。デIFOバスは、それにヘレンもまた、いとも緊張した面持で書状を開いて、外に出ながら熱心にそれを読み、段を下りて緑の庭園に出ましたが、そこで一時間ばかりも一緒にそれを熟読しながらこの事件について協議し熟慮を重ねました。

彼等二人には手紙を読ませておいて、すぐ筆をパンダラスに返しませう。<sup>一七〇</sup>彼は万事都合よく行ったことをとくと見定め、大急ぎで広間には行って行って言いました。

「皆さんおくつろぎ下さい。クリセイデ、さあ行こうよ、王妃のヘレンさんがお待ち兼ねだ。それに、殿下たちお二人もね。さあ腰を上げるんだよ。姪のアンティゴニーさんでも誰でも好きな人を連れて行けばいい。何でもないんだよ。実際、人数が少ないほどいいんだ。さあ一緒に行こうよ。いいね、お三方にうやうやしくお礼を申し上げてさ、潮時<sup>一七二〇</sup>を見計らってお暇するんだよ、長座してトウローイラスさんのお氣持を乱しちゃ悪いからね。」

パンダラスの意図を全然知らないクリセイデは、「さあ参りましょう、叔父様」と言いながら腕を組み合って叔父と一緒に奥には行って行きましたが、こう申し上げることにしよう、このような表情で、と頭をひねるのでした。パンダラスが真剣な態度で言いますには、「皆さん、どうぞここにお残り下さい。お静かにお願いしますよ。奥の部屋にどんな方々がいらっしやるかってこと、そのうちお一人がどんなご容態かってことをよくお考えいただきたいんです。ああ、お治りになればいいんだが。」

奥には行って行きながら彼は姪に言いました。

「物柔かに切り出すんだよ、クリセイデ。頼むから、あの方のお命を奪うなんてことはしないことだよ。お前のためにあれほど悩んでらっしゃるんだからね。そんなことは許さないよ、われわれすべてに魂を授け給うた神の名において、結婚の二つの冠の力によって、絶対に許さないよ。人に悪く言われようが気にすることなんてないさ。あの方がどんな方かってこと、また、どんなご状態かってことを考えてもらいたいね。さあ、さあ、早く！ 考えてご覧よ、そんなにぐずぐずしていたんじゃ、時間を損するばかりだ。結婚した暁にはきつとそのことが二人の話題になるだろうよ。それにまた、二人の仲を疑う者は今のところ一人もいないんだから、まさに今だよ。勇気を出して急ぐのは！世間の人が目隠しされている今のうちこそ稼ぎ時だ。躊躇したり、追っかけてみたり、ぐずぐずしたりすれば、世間の人は藁一本動いてもさてはと疑ぐるだろうよ。そんなことがあってから楽しい日々を送ろうとしたって後の祭さ、だって、かくかくの女がこう言ったのだ、しかじかの男がこんな顔をしたのだ、世間の口はうるさいものだよ。時間がたつばかりだ。もうお前にかかり合っではいられない、さあ、急ぐんだ。<sup>一七五〇</sup>あの方のご病氣をお治りするんだよ。」

ともあれ、今ここにいられる恋人の皆さんに申しませう。身を伏せたトゥロイラスは少しも不安を感じないで二人の囁くのを聞き得たのですが、「ああ、今まさに運命の骰子は投ぜられるのだ。争が全く絶え果てるか、すぐ慰められるか、どちらかだ！」と考えたのでした。彼は今や初めてクリセイデに愛を求めようとするのですが、ああ、果してどのように口を切るでしょうか。

巻の二おわる

注 解

- (13) 耳が熱くほてる時には、誰かが自分の噂をしているのだという言い習わしがあった。
- (14) 手紙を羊皮紙に書いてのち、それが継ぎ合わされた。紙の発明の後にもこの習慣はつづいたという。

(非常勤講師)